

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目次

- 図書館雑感…………… 1
- 私のおすすめ本…………… 3
- 平成24年度 図書館報告 …… 4

図書館雑感

総合文化学科准教授 伊藤 弘 昭

「本離れ懸念」「1か月全く読まず53%」「図書館もあの手この手」、読売新聞が実施した2013年の『読書週間世論調査』の結果を報じた記事(2013.10.20)の見出しである。特に第1面では「スマホ使えば使うほど…読書時間減る傾向」と大きく取り上げている。同調査によると1日に1時間以上使う人に限ると「読書時間が減少した」と回答している人が27%にのぼり、また「この1年間に図書館を利用した」と答えた人も35%(前年40%)だったとある。(記事では「この1年間に図書館を全く利用しなかった人は65%に上る」とあり、同じデータでも取り上げ方によってかなり印象が違うとも感じないではないが、皆さんはどう感じるでしょうか?)一方、長きにわたって実施されている毎日新聞の『読書世論調査』(2012)での調査結果をみると総合(書籍・雑誌)読書率65%(同76%)、図書館利用では「ある」29%、「ない」69%とあり、数字的には読書、図書館について同様の傾向を示しているといえる。ただし、その内容の解釈にはかなりニュアンスの相違が感じられる。『読書世論調査』では総合読書率の減少は雑誌読書率の激減(60%→47%)によるところが大きく、書籍読書率については「最近20年間は50%前後で安定して推移しており、大きな変化は見られない」とし、図書館利用状況についても「90年代には全体の2割前後だったが、02年以降は3割近くに増えて安定している」としている。つまりは本や図書館の利用状況については、その率が高い

か低いかの判断は別として、それほどの変化はないともみてとれる。

これらの状況をごく単純化して捉えるならば、情報の利用目的によるメディア選択の変化を反映しているにすぎないともいえる。雑誌読書率の激減に象徴される現状認識・問題解決等のための素材・材料としての「情報収集」型メディア活用におけるスマホを代表とするネットワーク情報資源依存への移行傾向の顕著化を示しているとともに、一方では教養・娯楽のための「鑑賞」型メディア活用での書籍利用率はそれほど変わらないとの見方もできる。メディアの選択肢が増えれば書籍への依存集中の相対的低下も当然のことであり、またネットワーク情報資源の普及はメディア利用人口の母数拡大に大きく影響し、その結果、従来メディアの(利用数というより)利用率が急落したとの印象をさらに強めているにすぎないとい個人的にうがった考えをしてしまう時もある。とは言っても、率だけではなく読書については、その数・時間とも減少傾向にあることは事実であり、「読書離れ」「活字離れ」現象が存在することは確かである。

このメディア利用傾向は、そのまま図書館利用状況にも反映されている。本学図書館においても、今年度はやや持ち直してきているものの入館者数はここ数年減少し続けてきている。特に学期末の試験・レポート作成作業のための延長開館時の利用状況は数年前と比較すると非常に寂しさを感じざるをえないものがある。コンピュー

タセンターは活況を呈しているようであることから学生の情報収集におけるメディア活用の現状を最も実感できる光景でもある。ただし入館者数は減少しているものの、貸出における同期間の統計データは別の状況を示している。1日平均の貸出冊数・人数とも25冊・15人前後ではほぼ変わりなく推移してきている。この状況は先に述べた書籍利用の動向と符合するのではないか。図書館の「利用者」「不利用者」の二極分化は著しいものの書籍ユーザーの利用実態についてはそれほどの変化はないともいえる。勘違いしないでいただきたいのは「だから問題ない」「このままでいい」と述べたいわけではないことである。特に大学図書館としての役割を踏まえるならば、学習活動においては貸出実績以上に入館利用実績の方が重要であり現状打破のための改善を積極的に実践していかなければならないのは当然のことである。ここで言いたいことは、本学図書館も含めた図書館全般の利用状況の低迷感の背景には、利用者そして図書館双方が持っている（特に日本の）図書館イメージが大きく影響してきたということである。「図書館」＝「資料を無料で見たり、借りたりできる場所」「無料貸本屋」等のイメージである。しかし現在の情報環境においてそれだけでは図書館の存在意義を示すことは難しく本来の図書館の機能を広く発揮し、理解してもらう必要がある。

もともと図書館が図書館として成立する基本的構成要素として「情報資源（資料）[図書館コレクション]」「施設・設備 [場]」「図書館員 [人]」があげられてきた。最低でもこの3つが存在し機能してこそ図書館の役割を果たしていくことができる。なかでも「情報資源」すなわち図書館コレクションは全ての図書館サービスの基盤であり、それぞれの図書館イメージをつくりあげる最重要の要素であることに間違いはない。ではあるが、日本においてはあまりにも「図書館」＝「図書館コレクション」との偏重したイメージを抱きすぎのように感じる。その要因の一例として、公共図書館が図書館政策として重視してきた「貸出中心主義」の影響をあげることができる。好きな場所で好きな時間に資料を自由に利用できる貸出サービスの積極的展開は、図書館の認知・利用普及のために大きな役割を果たしたが、「図書館」＝「資料を借りる所」（≠「利用する場所」）とのイメージの固定化をもたらすことにもなった。また日本では本の入手に関しては「書店」という方が定着している人も多いためか「欲しい本は自分で探す」との意識も強いようである。そんなことから図書館は「自分で自由に探して、借りていくことができる資料が大量にある所」、コレクションすなわち図書館サービスとみなされがちになり、他の要素である「場」「人」への期待度はあまり高いものではなかった感もある。しかし図書館が単なる資

料の入手先にすぎない存在であるならば、情報の質の問題は別として、ネットワーク情報資源（機関）の利便性に太刀打ちできるものではないだろうし、存在理由そのものも問われかねない。本来、図書館は資料貸出のみならず情報利用のプロセス全般にわたる支援を用意し、提供するところに大きな役割があると考ええる。つまりは情報入手の前後の段階での支援、例えば「情報探索活動（探し方）支援」や「目的に応じた情報利用環境の提供」等まで実施できてこそ他機関との差別化が図られる。そのためには図書館の「場」「人」の機能拡大が必要であり、今後の図書館のあり方を探る一つの課題であろう。

実際、現在ニュース等で取り上げられる図書館の工夫や取組の多くは「場」「人」に関するものである。閲覧室のサロン化、飲食可能コーナーの設置等、居住環境の快適さを追求した取組は、貸出を前提とした「資料展示空間」から「情報利用空間」への機能転換であり、また図書館イベントにおける単なる資料紹介型企画から図書館資料利用を契機とする人的交流型企画への展開も「コミュニケーション空間」としての可能性を模索する動きであろう。「場」としての図書館機能の充実・強化の傾向を見ることができる。「人」についても従来のレファレンスサービスの充実に加え、多様な人的支援を実施し、積極的にアピールしている所も増えている。なかには「司書」という名称に変えて「コンシェルジェ」と称し、図書館内にとどまらず図書館近郊に関する各種の問い合わせに対応し、情報案内人としての機能を強調している例もある。人的コミュニケーションによる様々な目的・レベルに応じた情報活動への細やかなアシストは、司書の専門性を最も発揮できる場面とも言える。現在のところ「図書館コレクション」に比べて、その重点の置き方にはまだまだ付加価値的な印象を感じてしまうが、「場」「人」をどう位置付け、展開していくかは今後の図書館のかたちを決めていく上での最重要課題であろう。そして、それは特に学生の学習支援に重きをおく大学図書館にとってはもう既に多くのところで具体化され実践されている。大学図書館における学びの場（空間）としての「ラーニング・コモンズ」としての取組はその典型である。“コンピュータ・エリア”“グループ（共同）学習スペース”“プレゼンテーションスペース”等の設置や学習支援スタッフの配置などは、まさに「場」「人」の再構築による機能の充実にほかならない。本学図書館においても同様の取組は検討されている。今後、それがどう具体化され皆さんに提供できるか、私の希望的観測を含め「乞うご期待」と言いたいところである。

図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

現在図書館には、4人の学生アルバイトがおり、貸出返却などのカウンター業務をはじめ、さまざまな仕事にあたっています。

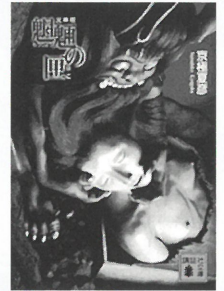
アルバイトの皆さんから「おすすめ本」を紹介してもらいました。

松田達也（総合文化学科1年）

「魍魎の匣」 京極夏彦 著 講談社 1995

私のおすすめするこの「魍魎の匣」（もうりょうのはこ）は、百鬼夜行シリーズと呼ばれる作品群の第二弾目になり、私的にはこのシリーズが一番入りやすい作品だと思い、その中から1冊をおすすめしました。

この作品では、駅で起きた人身事故と、ある事件が次第に結びついてやがて大きな事件へと発展していき、その解決に奔走する主人公たちの様子を書いています。最初は関係のないようなことも、終盤に進むにつれて徐々に関係が結ばれ、思いもよらぬ結末を迎えることとなります。このシリーズには、各タイトルに妖怪の名前が入っており、その妖怪の特徴を連想させるような事件に主人公たちが巻き込まれていきます。ある一つの事件を皮切りに、次々に別の事件とつながり、次第に一つの大きな事件として形が出来上がっていく様子は、読む手を止めることを惜しんでしまいます。この作品を含めシリーズ全部がとても面白いので、ぜひ、読んでみてください。



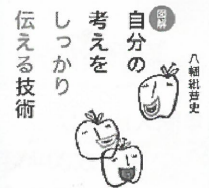
菅原千歩（子ども学科1年）

「自分の考えをしっかりと伝える技術」 八幡紘芦史 著 PHP研究所 2008.7

伝えたいつもりが、伝わっていなかった。また、言った言わないということでケンカになってしまった。このようなことがときどきあると思います。この本はこのようなことを減らし、相手への伝わり方を大きく変えることができる方法が図解を使って分かりやすく書かれています。

伝える相手との関係や年齢層などで話し方をアレンジする方法や相手が理解しやすいように結論から話す方法などの「話し方のテクニック」から、話をするタイミング、場所、話し方などの注意事項など、読めば必ず「へー、そうすればいいのか!」と感心すると思います。

卒業研究の発表や就職試験の面接、もちろん日常的にも使える内容が盛りだくさんなので、ぜひ、一度読んでみてください。



話しベタが
劇的に治るクスリ!

鈴木 遥（子ども教育学科1年）

「刀語」 西尾維新 著 講談社 2007.1

私のおすすめする本は、西尾維新さんが書いた「刀語」です。この本の舞台は「尾張時代」と呼ばれる尾張幕府が治める、江戸時代の日本によく似た「日の本」です。日の本の伝説の刀鍛冶、四崎記紀が作った変体刀の収集を幕府から命じられた奇策士とがめが、刀を使わない剣士、虚刀流七代目当主である鑓七花と刀集めの旅に出て、変体刀の所持者や変体刀を狙う真庭忍軍と戦っていく、というお話です。

西尾維新さんの言葉遊びや毒を交えた会話、独特のボケとツッコミがふんだんに使われているので、個性豊かな刀語の世界にのめりこんでしまいます。アニメ版もありますが、登場人物の細かい心情、所々にある笑いをさそう地の文など、小説をおすすめします。全12巻ありますが、1冊のページ数はそれほど多くないので、読むのが苦になったりしないと思います。



佐藤沙由美（子ども教育学科3年）

「こいしりシリーズ第4巻『ときぐすり』」 畠中 恵 著 文芸春秋 2009.3

この本は、シリーズになっており、『ときぐすり』で第四弾になります。

舞台は江戸時代の神田、登場人物は神田の町名主・高橋家の跡取り息子の麻之助と幼馴染みで町名主を引き継いだばかりの容姿端麗な清十郎、同じく麻之助の幼馴染みの真面目で堅物な見習同心吉五郎の3人です。

この『ときぐすり』の中では、麻之助が死に至るかもしれない眠り薬を飲んで死にかけたり、江戸の女性に大人気の清十郎が初めて恋に落ちたり、堅物の中の堅物である吉五郎の浮わついた噂から事件に繋がります。中でも、この本のタイトル「ときぐすり」の話の中で、主人公滝助が「歳月を過ごしていくと、そのことが心を癒してくれる。時そのものが、一種の薬となる」と、読者をあたたかく励ましてくれるようなことを伝えてくれます。このシリーズは、『こいしり』から始まります。時に切なく無情な話もありますが読むほど、おもしろく、あたたかい気持ちになれるシリーズです。ぜひ一度読んでみてください。



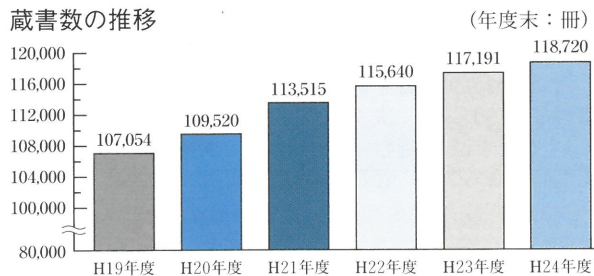
平成24年度 図書館報告

(東北文教大学・東北文教大学短期大学部)

資料収集

図 書	1,546冊
学術雑誌	86種
新 聞	17種
紀 要	584冊
A V 資料	97点

蔵書数の推移



利用状況

年間入館者数

年度	年間入館者数 (人)
平成20年度	54,384
平成21年度	53,487
平成22年度	54,256
平成23年度	35,270
平成24年度	26,580

年間館外貸出冊数

年度	年間館外貸出冊数 (冊)
平成20年度	6,332
平成21年度	6,163
平成22年度	7,371
平成23年度	7,972
平成24年度	6,881

1人当たりの年間貸出冊数

年度	1人当たりの年間貸出冊数 (冊)
平成20年度	9
平成21年度	9
平成22年度	9
平成23年度	13
平成24年度	10

1日平均貸出冊数

年度	1日平均貸出冊数 (冊)
平成20年度	25
平成21年度	24
平成22年度	28
平成23年度	28
平成24年度	26

年間ビデオ・DVD貸出 (館内)

年度	年間ビデオ・DVD貸出 (館内) (点)
平成20年度	414
平成21年度	533
平成22年度	560
平成23年度	507
平成24年度	415

貸出資料ランキング

<図 書>

書 名	著者名	貸出回数
1 学校の挑戦：学びの共同体を創る	佐藤学／著	71
2 フィンランドという生き方	目黒ゆみ／著	22
3 競争しても学力行き止まり	福田誠治／著	18
3 ビジネス実務マナー検定実問題集3級	実務技能検定協会／編	18
5 漢検過去問題集2級	日本漢字教育振興会／編	16
6 キミに会いにきたよ	田村みえ／著	15
6 ビジネス実務マナー検定実問題集1・2級	実務技能検定協会／編	15
8 保育いきいきパネルシアター	松家まきこ／著	14
9 らくがきぶたくん	あきやまただし／作・絵	13
9 くれよんのくろくん	なかやみわ／作・絵	13
9 げんきですか？	田村みえ／著	13
9 いつもいっしょに	こんのひとみ／作	13
13 手あそび歌あそび	小泉八重子／監修	12
13 すぐに弾ける子どものうたピアノ伴奏115	安藤真裕子／編曲	12
13 舟を編む	三浦しをん／著	12
16 えがおのむこうで	田村みえ／著	11
16 アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書	ジェームズ・M・バーダマン／編	11
16 ギリシア神話：神々と英雄に出会う	西村賀子／著	11
16 手にとるように心理学がわかる本	渋谷昌三／著	11
16 みんなのパネルシアター	阿部恵／著	11
16 ふれあいいっぱいパネルシアターこれくしょん	阿部恵／著	11
16 りんごがひとつ	ふくださぐる／作・絵	11
16 100かいてのいえ	いわいとしお／作	11
16 「こんなとき!」の場面別手あそび	阿部直美／著	11
25 ともちや	内田麟太郎／作	10
25 なつとうぼうや	わたなべあや／作	10
25 わたしのワンピース	にしきかやこ／えとぶん	10
25 えんそくバス	中川ひろたか／文	10
25 阿部直美のふれあい手あそび歌あそび101	阿部直美／著	10
25 たのしい手あそびうた	阿部恵／著	10
25 使える!保育のあそびネタ集	井上明美／編著	10
32 うたって演じて!パネルシアター	月下和恵／著	9
32 実習に役立つ表現遊び	岡本祐子／編著	9
32 こどもが夢中!保育の遊び展開アイデア集	井上明美／編著	9
32 手あそびゆびあそびうたあそび	日本保育実技研究会／編	9

学生からの主なリクエスト

<図 書>

隠喩としての病い エイズとその隠喩	スーザン・ソントグ／著
敬語コミュニケーション	蒲谷宏／著
韓国語の敬語入門 テレビドラマで学ぶ日韓国の敬語比較	韓美卿／著
理科系の作文技術	木下是雄／著
70歳死亡法案可決	垣谷美雨／著
どこいったん	ジョン・クラッセン／作
エプロンメモ よりぬき集	暮らしの手帖社／編
すてきなあなたに よりぬき集	暮らしの手帖社／編
ロコミ伝染病	神田昌典／著
誰からも嫌われない図解店員のマナー	新井麻子／編
都市伝説の真実	宇佐和通／著
都市伝説の正体	宇佐和通／著
他者の苦情へのまなざし	スーザン・ソントグ／著
パラダイスロスト	柳宏司／著
ひまわりのおか	葉方丹／著
続・時をかける少女	石川透／著
万能鑑定士Qの事件簿	松岡圭祐／著
ゾンビ映画大辞典	伊東美和／著

<DVD>

コクリコ坂から	宮崎吾郎／監督
耳をすませば	近藤喜文／監督
塔の上のラプンツェル	ネイサン・グレン／監督
B E C K 通常版	堤幸彦／監督
バーレスク	スティーヴン・アンティ／監督
征志とユキの物語 阪急電車	宮崎暁夫／監督
阪急電車片道15分の奇跡	三宅喜重／監督